

〔講演要旨〕 徳島県における地震・津波碑の活用について

徳島大学 井若和久・上月康則・山中亮一・村上仁士

1. はじめに

2011年3月11日東北地方太平洋沖地震では、1896年明治三陸地震、1933年昭和三陸地震に伴う津波により被害を受けた地域において、「地震があったら津波に用心」や「此処より下に家を建てるな」などと記された石碑の教訓を活かして被害を免れた人もいた。

わが国は、全国各地で繰り返し地震・津波災害を被って来た歴史があり、それらの多くの地域では先人達が建立した地震・津波碑が現存している。近い将来、全国各地で大規模な地震・津波が発生することが予測されているなかで、これらの地震・津波碑を教材にし、減災に活用すれば、今回の東北地方太平洋沖地震のような減災効果が各地で得られることも期待される。

著者らは、徳島県に現存する地震・津波碑(合計37基)を調査、整理して来た。ここでは、関係者へのヒアリング調査により、徳島県における地震・津波碑の活用事例を紹介する。

2. 研究結果

2.1 自治体の取り組み

徳島県では2009年度に、県民の防災意識の向上を目的として、著者らと協働で、『南海地震を知る～徳島県の地震・津波碑～』を作成し、県のHP上での公開、寄り合い防災講座や各種イベントで紹介している。

また、2010年度には、徳島文理大学人間生活学部メディアデザイン学科と協働で、徳島県の地震・津波碑を通してとくしまの地震の歴史を学ぶ防災教育教材「津波碑から学ぶ・とくしま地震の歴史」(DVD)を作成し、2011年度から県内の小中学校の防災教育で使用されている。

2.2 地域の取り組み

日本最古とも言われる1361年正平南海地震の地震・津波碑が現存している美波町由岐地区では、2010年12月20日に、由岐湾内地区まちづくり協議が主催で、防災クイズラリー「みなみ防災ウォークラリー」を開催し、その中で由岐湾内にある地震・津波碑(2基)を取り上げた。その内容は、1グループ2～4

名の参加者が、由岐湾内の10カ所をチェックポイントを巡り、各地点に設置された携帯電話のQRコードから防災クイズの問題を読み取り、答えるといったものである。現地で地震・津波碑をクイズ形式で楽しみながら学習することができるため、参加者にも好評であった。

2.3 小中学校の取り組み

地震・津波碑が多い徳島県南部の海陽町、牟岐町、美波町の一部の小中学校では、防災教育教材として地域の地震・津波碑を活用している。

なかでも海陽町浅川小学校(2011年度より海南小学校と併合)では、毎年全校で町内の避難場所巡りを行っており、著者らが碑文内容を指導した「津波十訓」の前では高学年の生徒が低学年に碑文を読み聞かせている(写真-1)。その結果、生徒の碑文の内容理解が深まり、保護者にも伝えているようで、その内容が広がりつつあることが伺える。

また、夏休みには、海陽町教育委員会が主催で、町内の小学生を対象に町内の文化財巡りが実施されており、「震災後50年南海道地震津波史碑」と「津波十訓」の前では、昭和南海地震津波の体験者であり元浅川小学校校長が碑文内容や体験談を生徒に語り伝え、さらに、安政と昭和の南海地震津波の津波到達点を示す浅川観音堂石段「津波襲来地点石標」の前では、過去の津波の遡上高さを教えている。

これらの指導者に使用している地震・津波碑の教材の特徴について尋ねると、「小中学生でも碑文が読めること」、「内容が理解し易いこと」、「訪れ易い場所にあること」が挙げられた。



写真-1 碑文の読み聞かせを行う生徒